

# 島大と県立大有志の会 廃案求め松江で集会



安全保障関連法案に反対するプラカードを掲げ、廃案を訴える参加者—松江市西津田6丁目、市総合文化センタープラパホール

### 安保法案

参院で審議中の安全保障関連法案に反対し、廃案を求める島根大と島根県立大の有志で組織する2団体が5日、松江市西津田6丁目市の市総合文化センタープラパホールで集会を開き、約700人が参加した。終了後は市内をデモ行進し、民意を喚起した。

いずれも教職員らでつくる「島根大学人の会」と「島根県立大学有志の会」が主催し、島根県内の61団体と144人が賛同者に名を連ねた。

集会では、集団的自衛権の行使を容認する同法案は憲法違反に当たるとして、意見や思想、立場の違いを超えて廃案を目指すとい

話した。(井上蒼文)

平成 27 年 9 月 6 日 付 け ・ 山 陰 中 央 新 報

## 八雲と同時期来日、親交も

# ローエル功績観光に

松江

### 活用意義 小泉凡さん講演

明治の文豪・小泉八雲とされる。研究会は、研究(ラファディオ・ハーン、1850~1904年)と同時期に来日し、親交があった米国の天文学者パーシバル・ローエルの研究会が5日、松江市内であった。特別講演した八雲のひ孫で、県立大短期大学教授の小泉凡さん(54)は、2人の思いや功績を広めるとともに、観光資源などとして活用する意義を説いた。

ローエルは1883(明治16)年に来日し、日本文化や思想を研究した。日本文化を紹介した著書「極東の魂」は、八雲が日本に興味を持つきっかけになった

「文化資源としてのハーンとローエル」と題し、特別講演する小泉凡さん



「文化資源としてのハーンとローエル」と題して講演した凡さんは地域振興への活用例として、松江市内のゆかりの地を巡り、八雲の怪談の世界を体感できる「松江ゴーストツアー」などを紹介。異文化を受け入

れ、評価した八雲の開かれた精神や、ローエルの功績を若い世代に語り継ぐため、「今こそ、現代社会に生かすアイデアが必要」と説いた。(石川麻衣)

平成 27 年 9 月 6 日 付 け ・ 山 陰 中 央 新 報

# キャベツ追肥に汗流す

浜田

県立大と島根大、県立大短期大学の学生がともに地域課題を現場で学ぶ体験学習が5日、浜田市弥栄町をう

イールドに、4日間の日程で始まった。「弥栄の農林業と暮らし」がテーマのプログラムに学生14人が参加し、初日はキャベツ畑で農作業に汗を流すとともに、住民から人口減が進む山間部の現状などを聞き取り、認識を深めた。  
(三島かな子)

## 弥栄地区で 地域課題現場で学ぶ 県立大生ら

山陰両県の5大学・短大が取り組んでいる「大学と地域社会を結ぶ大学間連携ソーシャルラーニング」の一環で企画した。

学生たちは2班に分かれ、同町熊の山地区で米や野菜を作る斎藤繁美さん(67)ら住民4人に、農作物の鳥獣害の状況や農薬を使わない害虫駆除法などを教わりながらキャベツ畑の追肥作業に挑戦。斎藤さんが引率した班の学生7人は専用の道具を使い、8月下旬に植えたばかりのキャベツの横に肥料をまいた。

その後、集会所に集まり、1960年には110人いた住民が年々減り、今では

## 過疎の実態聞き取りも

5世帯11人になったことや人手が足りず草刈りに追わ

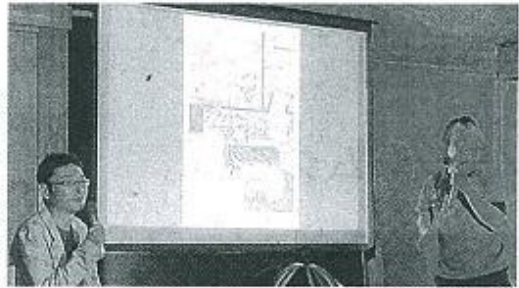
業の大変さや地域の過疎化などの実態を知りたい」と意気込んだ。一行は期間中、引き続き農作業などを体験し、最終日の8日に学習成果を発表する。



斎藤繁美さん(右)から追肥作業の手順などを聞く学生

# 怖い話にファン集う

小泉凡さんと作家・木原さん  
歴史館で松江怪談談義



妖怪「件」の漫画を取り上げて対談する小泉凡さん（左）と木原浩勝さん

松江ゆかりの文豪小泉八雲のひ孫で県立大学短期大学部教授の小泉凡さん(54)と、現代怪談作家の木原浩勝さん(55)による対談イベント「松江怪談談義」が11日夜、松江市殿町の松江歴史館で開かれ、県内外から集まった約100人の怪談ファンが耳を傾けた。

原さんの著書に収録された現代怪談などを話題に取り上げた。凡さんは、八雲の怪談が世界中で翻訳されたことに触れ「怖い話は誰もが共通して好む」と指摘。木原さんも「怪談は時代も超える。八雲が明治に書いた話が現代でも読めるのはすごいことだ」と説いた。

松江怪談談義は、怪談や八雲を通じて松江の魅力を伝えようと、松江市などでつくる実行委員会が2013年から毎年開いている。

(糸賀淳也)

平成 27 年 9 月 13 日 付 け ・ 山 陰 中 央 新 報

## 最優秀作品 内田さん(松江)

島根ビール妖怪ラベル

松江ゆかりの文豪・小泉八雲にちなんだ地ビールを製造販売する、島根ビール(松江市黒田町)が公募したラベルデザインコンテストの審査会が16日、松江市殿町のカラコロ工房であり、松江市石橋町の内田博通さん(39)の作品

小泉八雲賞に選ばれた内田博通さんの作品



が最優秀の小泉八雲賞に輝いた。

同社は2010年から毎年、怪談にちなんだラベルを募集し、特賞作を「怪談ビール」として千本限定販売している。今回は月照寺(同市外中原町)の「化け

亀」がテーマで、県内外から80点の応募があり、八雲のひ孫で県立大短期大学の小泉凡教授ら9人が審査。写实的で分かりやすい内田さんの作品を最優秀賞に選んだ。

審査員を務めた現代怪談作家の木原浩勝さん(55)は「亀に存在感がある。化け亀を知らない人が見ても興味をそそるデザインだ」と話した。

怪談ビールは10月末、松江地ビール館(同市黒田町)で販売。300ミリ瓶入りで、価格は税別1本450円。

(河野亜美)

平成 27 年 9 月 17 日 付 け ・ 山 陰 中 央 新 報

# 島根半島の神話

△山村 桃子▽

古代出雲国のアイデンティティとは何だろうか。杵築大社（出雲大社）や入海（宍道湖）といった今でも代表的な建造物や景物を、古人もまた思い浮かべたろう。その杵築大社の舞台となり、入海を形成するのが島根半島である。

## 佐太大神と国引きの神

# 古層と新層の時間包有



を杭としてそれを繋ぎ留めた。ここには鳥瞰的な視点がある。それも小さく作ってあった出雲国は神の手で拡張

された。「意恵」（今は国を記しにも見られない神であり終えた）という神の語り。半島中部の狭田国の大葉から、当時出雲国の中心部であった意宇郡の地名起源譚となる。島根半島とは、出雲国を最も特徴づける新たな地であった。

その半島は新層と古層の時間を抱える。最も古い時間として、佐太大神の神話がある。佐太大神は、古事記に「出雲国を最も特徴づける新たな地であった」と記され、母・支佐加比売命が佐太大神を産む時、「隠き岩屋なるかも」と言い、金の弓で窟を射ると光輝いた。その穴が今の加賀の瀬戸である。この神話には、島根半島北沿岸部における漁業の歴史がある。

半島における新しい時間包有は、国引きを行った八東水臣津野命とその御子・赤伊農意保須美比古佐和氣命にみられる神話である。「八東水」と「赤伊」はともに、以下の神名を称える枕詞的称辞である。こうした称辞を持つ神は、基本的に島根半島の神に見られるものであり、新たな地の神々として祝福的に名付けられたと思える。

八東水臣津野命の子・佐和氣命のサは稲作に関係する接頭語とも言われ、秋鹿郡にはその後・天鏡津日女風土記に、その種に佐太大神の社が鎮座すると記される秋鹿郡神名火山（現朝日山）。周辺には講武川、佐陀川の恵みに支えられた稲作地帯が広がる（島根県古代文化センター提供）。

山村氏を講師に迎えた出雲風土記連続講座第2講「島根半島の神話」は26日午後1時半から、松江市朝日町の松江テルサで（聴講無料、要申し込み）。問い合わせは島根県古代文化センターで電話08552（22）6725（平日午前8時半～午後5時）。

島根半島の誕生を神話として示すが、「出雲風土記」の国引きである。八東水臣津野命は新羅・隠岐・高志国から「国の余り」を網で引き寄せ、佐比売山（三瓶山）と火神座（大山）

文化

紙上  
ブック  
トーク

今日は連休最終日ですね！ 連休にどこにも行けなかった人。この本を読めば水族館へ行

った気分になれるかも。

『へんないきものすいぞくかなぞの1日』(松橋利光写真、なかのひろみ文、アリス館)は、世界最大のだんごむしや、テヅルモツルなど、あまり見る機会のない生き物たちの一日を、ユーモアを交えながら教えてくれ

文房具になったり仕事かえたり

一日が描かれます。マラカスが奏でるリズムと、それに合わせたクネクネさんたちのダンスが最高です。肩の力が抜けて、ほっこり。

みなさん、楽しい一日をお過ごしください。そして、明日からも頑張りましょう！  
(尾崎智子・島根県立大学短期大学部松江キャンパスおはなしレストランライブラリー司書)

つこしてみても、宿題は自分でしてくださいね！  
文房具になって、仕事をとりかえて疲れたら『きょうはマラカスのひクネクネさん

のいちにち』(種勝朋巳文・絵、福音館書店)がおススメ。クネクネさんと仲間たちが、大好きなマラカスを奏でながら、のんびり過ごす

所は、ホッチキス、コンパス、えんぴつけずりなど、さまざまな文房具に成り代わる男の子が描かれています。楽しそうに思えます？ いえ、いえ、どの文房具になっても痛そうなんです。文房具って大変…。

こちらにも大変そうな人がいました。『しごとをとりかえただんなさん』(ウイリアム・ウイリスナ絵、秋野翔一郎訳、童話館出版)の旦那

さんです。旦那さんは、自分の仕事より奥さんの仕事をとりかえっこしてみること

に。でも、旦那さん、何をやっても失敗ばかりで、傷だらけ。家の中もぐちゃぐちゃ。旦那さんは奥さんの大変さがわかり、自分の仕事をがんばるようにになりました。みなさんも、おうちの人と自分の仕事をとりかえ

いろいろな



次は、遊びすぎてお疲れ気味の人の目に覚めるような一冊。もし、一日、文房具になったとしたら…。

『いちにちぶんぼうぐ』(ふくへあきひろ作、かわしまなな絵、PHP研究

所)

# 松江市 小泉八雲の胸像寄贈 アイルランドの庭園に

松江ゆかりの文豪・小泉八雲（1850～1904年）の功績を顕彰する「小泉八雲記念庭園」がアイルランドに開園したのを祝う。松江市が八雲をかた



松江市が寄贈する小泉八雲の胸像（松江市提供）

どった胸像を同庭園に寄贈する。お披露目は10月の予定で、市は文化交流のシンボルになるよう願っている。

庭園は6月、八雲が幼少期を過ごした同国南部のトラモアにオープン。約1万平方メートルの敷地を9区画に分け、世界中を渡り歩いた八雲の人生を表現している。地元の非政府組織（NGO）が運営している。

胸像の原型は、島根大名菅教授の彫刻家・故倉沢実

さんが制作。庭園建設でNGOと話し合いを重ねた八雲のひ孫の小泉凡さん（54）と祥子さん（55）夫妻が、胸像の写真をNGO側に示したところ「この像をぜひ飾りたい」と要望があった。

これを受け、市が残っていた鋳型で作成。縦60センチ、横40センチ、厚さ10センチの青銅製で、英語で「松江市寄贈」と記した銘板も作った。費用は140万円。

10月10日に同庭園で贈式があり、2017年に地内に完成するインフォーションセンター内に設けられるという。市国際観客課の有間智雄係長は「庭園を訪れた人に、八雲を通して松江の存在を知ってもらいたい」と話した。

（石川麻衣）